

掲示板のことば

親鸞聖人『唯信鈔文意』

こころなり

なき

うたがい

「信」は

2026. 01

この言葉は、親鸞聖人が78歳の時に書かれた『唯信鈔文意』の冒頭、「唯信」、「ただ信ずる」の「信」についてのご了解を記されています。

「信ずる」とは、疑いのない心なのだとされています。

私たちが「何かを信じる」と言った時には、「これは間違いない」と自分の中で納得したような気持ちになることがあるのではないのでしょうか。あくまでも自分の判断で、この人を信じようとか、この言葉を信じようと、自分が納得のいく選択をしているように思います。

親鸞聖人は、信じるということは納得のいく選択をするのではなくて、疑わない心なのだとされるのです。

親鸞聖人は、「よき人」法然上人の言葉を信じていました。法然上人から「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」とお聞きした言葉を大切に抱えて生きていられました。法然上人と別れて50年経っても、親鸞聖人を頼りにされる門徒衆に法然上人の言葉を伝え続けられました。

それは、法然上人のことを信じて疑わなかった、というだけではなくて、法然上人が「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」との教えを生きたその姿の上にはたらく阿弥陀仏の本願を、親鸞聖人は受け取られたのだと思います。この教えこそ、疑うことのできない「まこと」とであると。

どんなことがあってもこのことは「ほんとう」と信じられる「うたがいないきこころ」は、どうやら人間にある「心」ではないように思います。

真宗大谷派 光明寺住職 小林尚樹